
皇宮の果て ～ 李枇・14歳

nagi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇宮の果て 李枇・14歳

【Nコード】

N7579L

【作者名】

nagi

【あらすじ】

帝の皇女として三番目に産まれた娘、李枇。
李枇には兄と姉がいた。

兄は国を継ぐ嗣子として大切に育てられる。
一方で、皇室の娘たち…姉と李枇は自由奔放に生きることを許されていた。

だが、いつしか魔の手は李枇に静かに忍び寄る。

悲運な過去を持ち、異国からこの地に仕えに来たコーディネリア。
代々宮廷の庭を管理する、庭師の琲弩。
李枇の家庭教師、湘翔。

謀反人に仕立て上げられ、家族を失い国を追われた李枇は、彼らと共に旅に出る。

いつか、必ず故国を取り戻すため。

その土をもう一度踏むまで私は生きる。

だから、私が国を取り戻すまで、きつと待っていて……。

ep 1 (前書き)

この小説に登場するのは、架空の国家と民族です。

青空は高く、透明な風が優しく髪を揺らす。

さんと降り注いでいた太陽は、少し遠慮がちに遠い西のはてからこちらを伺っている。

秋。今年も冬支度をはじめる季節が来た。

バルコニーの手すりに頬杖をついて、ボンヤリと吸い込まれそうな空を眺めていた少女は、その肌寒さにブルツと身震いした。

少女はこの国の帝の娘、李枇。

白い肌に、濃い茶色の瞳と黒い髪。皇族の血筋の証の色である。

「李枇様、外の風はもう冷とうございます。どうぞお部屋にお戻り下さいませ。お茶のお支度ができておりますよ。……まあ、でもなんて美しい空なのでしょう。秋の空は高いと申しますが、誠にございますねえ」

そういうと、バルコニーに現れた若い女も少女……李枇の脇に並んだ。

この女は、李枇の側仕えの者で、宮廷の楽士だった。

女の楽士というのも珍しく、その美しさも相まって、宮中の下働きの者たちの間では憧れの的となっていたが、身持ちの固い女で浮いた噂は一つも聞いたことがなかった。

「そうでしょう、コージェィ。秋は短いよ。すぐに明けない夜の季節が来るわ。だからその前に、この短い季節を堪能しておくの」

女の名はコーディリア。二十二歳になる。

李枇はコーディと呼び、何かと彼女を側に置きたがった。

コーディリアの方も、八つも年下の皇女に仕えることに何の抵抗も感じていないらしく、いつも朗らかに主人の傍らで微笑んでいるのだった。

「何をおっしゃいます。秋は短くも、毎年やってくるではありませんせんか。そう、儚むものでもございませんよ」

主人の寂しげな横顔を覗き込みながら、コーディは優しく返した。

「……………そうかしら。コーディ、あなたは明日を信じているのね。

来年を……再来年を……。永久不変の世界を。

今日、このバルコニーから見ている景色を十年後もここから見ているかしら。

それともどこか他の場所から見ているかしら。

でも、もしかしたらそれすら叶わぬことかも知れない。

ねえ、コーディ。あなたは明日が確実にあると、何をもって信じるの？」

「李枇様、その質問は楽士のコーディリアには難しすぎますわ。湘翔殿にでもお訊きになってみてはいかがでしょう」

「まあ、コーディ。逃げるの？ はぐらかさないで。

私は湘翔に訊きたいんじゃない、あなたに訊いているのよ、コーディリア」

コーディは参った、というように右手で頭を掻いた。

細い金の絹糸のようなサラサラのストレートがふわりと揺れる。

コーディリアは、この幼い十四歳の主人が好きだった。

宮中へ上がり、彼女に仕えて既に七年になる。

だが、初めて出会ったあの日と何一つ変わらない。

ときとして、途方もないような疑問を事も無げに投げかけてくるが、それは彼女が懸命に生きている証のように思えるのだった。

そして、決して側仕えの者を見下すことのない証。

宮中で何不自由ない優雅な生活を送りながらも、自分を決して失わず、勤勉で快活な皇女。

皇女という肩書きは、彼女にはそぐわないもののような気がしたが、コーディは、彼女が主人であることを本当にうれしいと心底感じていた。

「そう……何故、明日があると信じられるのでしょうか……」

私は、明日も明後日も明々後日も、来年も再来年も、ここでこうして李枇様にお仕えしようございます。

だからでございますよ。こうありたいと願う気持ちだが、人に明日を信じさせるのではないのでしょうか」

十四歳の少女は、楽士の答えに満足したらしくにっこり微笑んだ。

「ねえ、コーディ。私はあなたのことが大好きよ。

楽士だから教師の湘翔より頭が悪いとか、そんなふう思ったこ

とは一度もないわ。

湘翔だって、別にとりたてて頭がいいわけじゃないと思うの。

ただ、知識が豊富なことと、人に教えることが上手いだけなのよ。

頭がいいってことは、単に博学っていうのとは違うと思う。

どんな状況にも適応できるとか、あらゆるアクシデントに臨機応変に対応できるとか……そういうことだと思うのよね。どうかしら？」

子供のなりをしているが、口の利き方は大人そのものだ。

だが、大人たちの中で育った少女としては、当然のことかもしれない。

何しろ、いちばん歳の近い兄でさえ十二歳も離れているのだ。

「李枇様のような方に、ゆくゆくは国を治めていただきとうございます」

————言おうとして、コーディは言葉を呑み込んだ。

今の国王は李枇の父、呂偉である。

彼に不満を抱く国民も多いようだが、それ以上に呂偉の国を愛する気持ちには、より多くの国民の信頼を寄せていた。

問題は今の国王ではなく、その長男にあった。

李板の兄、呂暖。

今年で二十四歳になるこの太子は、国民の評判も良く、学芸にも秀でていた。加えて言えば、一国の帝となる充分な容姿も兼ね備えている。

だが、呂暖はコーディの目には、一国を統治するには不向きな人物と写っていた。

勤勉で、真面目で、思慮深く、与えられたこと、教えられたことは完璧にこなす男。だが、それは彼より上に立つ人物があってのこと。

10

つまり、指導者や統治者には向かないタイプなのだ。
ナンバーツーであってこそ有能とされる。人としては、尊敬できる人物だが、彼には国の政をとりまとめる力はない。

残念だが、それが呂暖という男である。

「ふう」

コーディの口から無意識にため息が漏れた。

「まあ、コーデイったら。人の話を聴いているのかしら？」

李枇が上着の袖を引っ張って言った。

この少女は背丈も低く、全体的に小作りな感じがする。ちょっと見は少年。彼女の頭の回転の速さを考えれば、女にしておくのは勿体ない。

側仕えの者でさえそう思うのだから、帝が同じように思わないはずはないだろう。

李枇は呂暖と違い、いわゆる勉強のできる優等生タイプではない。だが、彼女の言うとおり、勉強のできるできないが人の器量を計れる材料ではないのだ。

「頭が良いということは、どれだけ沢山の人の言葉を覚えたか、とかマニュアル通りに事をこなせるかではなく、どれだけ沢山のことを自分の頭で考え、実行できるかということではないかと思います」

傍らで、李枇が真剣に頷いた。

「私、コーデイのようになりたいわ。十年たったらあなたのような素敵な女性になっているかしら」

「—————ま、まあ、何をおっしゃいます。勿体のうございます。コ、コーデイリアなんか、ちっとも素敵じゃありませんよ。それより奥方様のような貴婦人におなりになるのがよろしいんです」

思いもよらぬ主人の告白に、慌てふためいたコーディは赤くなつた。

「そうかしら。お母様の娘だからって、お母様のようにする必要もないと思うわ。どんな人が素敵だと思うかも人それぞれじゃないかしら。それに私、貴婦人ってタイプじゃないでしょ、どう見たって」

そう言うと、李枇は丈の短い直衣の裾を持ち上げてヒラヒラさせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7579/>

皇宮の果て ～ 李枇・14歳

2010年11月14日10時53分発行